

太平洋の森から...

NO.26TAUBAN号

パプアニューギニアとソロモン諸島の
〒141-0031 森を守る会

品川区西五反田8-10-14-206

辻垣方 03-3492-4245 頒価200円



ウイアク村「森の家」の夕餉 飯出佐恵 画

MAISIN TAPA CLOTH

The Maisin people live in nine villages along the shores Colling Wood Bay in northeastern Papua New Guinea. Until the early 1960 s, the people made most of their own clothing from the beaten inner barks of several wild and one cultivated tree. Since that time, European cloth has become the common dress, but Maisin women continue to make designed tapa cloth. They wear it along with other traditional in local celebrations. They also give tapa cloth as a form of wealth in ceremonial exchanges and in trade with neighboring people for clay cooking pots and for stringbags. Tapa cloth forms a very important part of Maisin cultural identity. Maisin cloth are recognized as the finest produced in Papua New Guinea. In recent years the sale of Tapa cloth in the tourist market has become an important source of income for people in the villages.

written by Maicad

2007年6月29日～7月21日

ソロモン諸島 地震・津波被害

調査 報告

清水靖子

2007年4月2日(月)、ソロモン諸島ウエスタン州でマグニチュード8.1の地震が朝7時40分頃発生し、高さ数メートルの津波が島々を襲いました。村々の家屋は倒壊または流出し、53人が死亡、被災者は5万人と報道されました。

現地の状況について「森を守る会」にも問い合わせがあり、調査の必要を感じ、清水靖子が調査に出かけました。調査期間6月29日から7月21日まで。

被災された方々が地震・津波の前にどのような暮らしをしていたのか、原生林を守っていた地域と破壊された地域では被災状況や復興の可能性に違いが出てくるのか。伐採と津波の関係などに焦点をあてて調査しました。

はじめに 津波被害の中心となったウエスタン

州の島々は貴重な熱帯雨林の伐採の激しいところで、1966年以降、日本も関係のあった外国企業による伐採がつづいてきました。そして日本はその大半を30年間輸入してきました。またかつては日本軍が侵略し、住民に多大な被害をもたらした地域でもあります。その意味でも私たちの責任を見過ごすことができません。

現地に行ってみると、やはり熱帯雨林を失った村々での地震・津波からの再建の困難さは明瞭でした。食料・水・家屋再建の木材の不足をどこも訴えていました。避難先のキャンプへの緊急援助の第一期は終わり、長期的な復興への支援という二期が開始されたところでした。

3週間のうち、首都のホニアラでは救援関係者と熱帯雨林調査の関係者にインタビュー。被災地のウエスタン州では、ニュージョージア島のムンダ、ギゾー島各地、ヴェラ・ラベラ島各地を訪れました。

今回の被災時刻は朝食後の活動開始時に起こったこともあり、さらにはアジアでの津波被害の情報を熟知していた結果、島民たちは声をかけあって高台に逃げることを優先しました。しかし津波の到来は早く、逃げ遅れた人々、幼児、高台まで遠い地域などに犠牲者が多々でたことは悲惨でした。

7/1～3 ニュージョージア島の中心地ムンダの
ロッジに宿泊して調査。嵐と雷と雨。

最後の一日がときどき晴れ。ムンダはウエスタン州の飛行便や船便の中継地・情報の交差点である。

レンネル・マム(Renel Mamu)さん(69歳)との再会とインタビュー。現在ムンダのドンデ村での長老会議の長。彼はかつて、ソロモン・タイヨウ(日本の大洋漁業の子会社)によるカツオー本釣りのための撒き餌(キビナゴ類)の大量漁獲に抵抗し、『森と魚と激戦地』(北斗出版/清水靖子著)に登場した人である。

「津波はムンダを取り囲む環礁群にぶつかって弱まってからムンダに入った。高さは1メートルほどでした。皆で声をかけあって高台に逃げた。私の家は伝統的な高床式でしっかりしていたので壊されなかったが、浸水・倒壊の被害にあった家も多々ある。」

「津波直後はギゾー島からの津波の負傷者が運びこまれてきて一時は大混乱だった。重病人は首都のホニアラに送った。」「津波の1週間後には支援の物資が中継基地としてのムンダに到着。ついでギゾー島などに運ばれて行った。」

「魚について。日本のタイヨウ漁業による時代は環礁の魚が減ってしまった。今は州政府の元でのソロモン・タイヨウなので、漁獲量は激減している。そのおかげでムンダの魚も豊かにある。私たちはローカルマーケットで魚を売っていい収入を得ている。」

「津波後、魚は一時的に減った。ギゾー島などで環礁が破壊されているところから、ムンダに魚が逃げてきたのか、その後ムンダに集まってきている。津波以後の大きな変化としてムンダの潮位があがっている。」と強調した。

「私たちの部族はムンダでの唯一の深い森を持っている。伐採企業に手渡さないように、長老たちの会議があるたびに確認しあっている。うっかりすると政治家のコネで、若者たちが伐採会社に売りかねないからだ。先祖代々私たちは森とマングローブ林を大切にするように。そうすれば暮らしも海も豊かになると伝えてきた。」

「ソロモン・タイヨウについて。ソロモン諸島政府は日本の企業に再びもどってきてほしいと交渉中だが、ウエスタン州の政府は反対している。」

最後に彼は言った。「これから私は自分の人生の歴史を書いてみたい。書いたらあなたに送りますよ。見てください」

指導力を発揮しつつ、いい人生を送ってきた人の豊かな表情がそこにあった。

ヴァインガ・ティオンさん(Vainga Tion)。

ロッジの舟の手配の支配人。

「地震以前の昨年に、海に茶色の軽石のようなものが海に浮かんでリーフに押し寄せていた。」(地震の直接の原因はプレートの変動にあったが、ムンダ沖から北西方向にかけて海底火山が点在する。)
「森の伐採はウエスタン州各地で行われてきたので、川から海に流れ出て、海に黄色い帯をつくり土砂を送っている。伐採による土砂は一般には茶色だが、粘土質から

以下の図の出典「ソロモン諸島地震津波に関する緊急現地調査報告
(独立行政法人港湾空港技術研究所津波防災研究センター)」

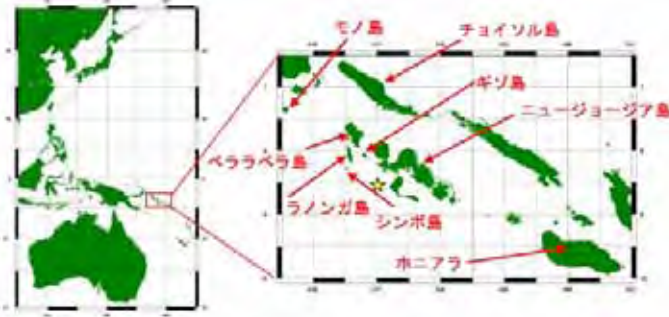


図-1 ソロモン諸島の位置



ギゾー島の丘の上のキャンプ地を巡回するドミニコ会のシスター

のものはオレンジ色っぽい。畑（ガーデン）からの土は濃い茶色なので区別できる。川と海にいつも大量に流れ出ているのは伐採による土だ。」

「私は伐採に大反対。環境破壊の最たるものだ。何百年もの樹が一瞬のうちに切られてしまう。腐敗した政治家と伐採会社がつるんでソロモン諸島の森を壊している。」「原生林を守るために、今二箇所の地主たちが裁判で戦っている。ひとつはニュージョージア島のビルハーバーの東沖の島。もうひとつヴェラ・ラベラ島の地主で、6月はじめにソロモン・スターのページに反対する抗議行動の写真記事が出た。（後述するレオナ村のこと）」

7/3 ~ ギゾー島へ。嵐がつづく。ギゾー島の人口は9000人。被災者は3000人。900軒の家が崩壊または流出した。死者は33人。同島のギゾー市はウエスタン州の州都である。

ギゾー島の伐採は独立以前の1970年代にニュージランド系のAllardyce社が、貴重な樹種を中心に大規模な伐採を数年間行った。ほとんどの大きな木はなくなった。

ギゾー島は津波以前も森が少ないので水源も不足していた。そのため津波被災後のキャンプ地での水不足と、家の再建のための木材不足が顕著だった。

津波被災者たちの支援に草の根で活躍しているドミニコ会の修道女たちの話。



ギゾー島ティティアナ地区 見渡す限りの廃墟の中に教会の骨組みだけが残っていた。

「自分たちの家も津波でやられた。津波が押し寄せてくるとき、ポリスたちが人々に急いで高台に逃げるように言ってまわっていた。それで皆丘の上に逃げた。人々は今も被災キャンプ地にいる。テントは配られたが、ワントク・システム（一族郎党身内間の親密な相互支援関係）で、関係者経由ワントクに行き、平等ではなかった。」

「私たちは巡回してトラウマ状態の人々のカウンセリングをしている。また聞き取りをしながら、必要性に応じて支援物資を配っている。家の再建に必要なブッシュ・ナイフ（木を切ったり、草刈や調理まで、万能の働きをする）は必需品でこれも配った。」「津波の後、ギゾー島の魚は不味くて当分食べられなかった。蜜蜂は花不足で蜜蜂自身の集めた蜜を食べて生きているので、今蜂蜜が取れる状態ではない。」

7/8 ギゾー島 マラケ・ラヴァ Malake Rava 地区に行く。

（案内人はドミニコ会修道院のマリー・トムさん）

南東突端にあるこの地区は政府の病院、看護人たちの施設、政府役人官舎が立ち並んでいたところであるが、津波をまともに受けて見渡す限りの廃墟と化した。移住先は丘の上で現在もテント暮らしである。海岸に3箇所ほど水道が残っていた。女たちは丘を下りて、その水道で洗濯をし、水汲みをしていた。

手伝っていた子供たちにインタビューすると、「朝ビスケットを買いにお店にいったところで地震があった。女の人が丘に逃げるように叫んでいたので、急いで丘に逃げた。」と語る。

政府関係者であるため収入はあり、宿舎の再建は政府次第という状況にあった。



ギゾー島ヌサ・バルカ地区 津波の直撃で廃墟になった家

7/9

ギゾー島 ヌサ・バルカ (Nusa Baruka) 地域へ行く。(案内人は同上)

高台から遠いため死者がもっとも多かった集落である。キリバスからの移住者たちが漁業に従事し、近くの魚マーケットで地の利を得て暮らしていた。

地震の直後の強烈な津波が1.5メートルの高さで集落を襲い、家・舟・エンジン・漁具、暮らしのすべてを失った。80軒が倒壊。700人が被災。9人が死亡した。

ジョサイア (Yosaia) さん (49才)

「私は家の外にいた。津波は強くて巨大だった。私自身生命が助からないと思ったほどだった。目の見えない19才の息子のことが気になったが、津波の中でどうすることもできなかった。彼は壊れた家の下で三日後に遺体となって発見された。他の家族員は無事だった。家も漁具もすべて失った。今2つのテントの中で家族11人が暮らしている。漁に出ることも、売ることも、家を建てることもできない。政府の災害救援協議会 (NDC) が家を建ててくれると言っているがいつのことやらわからない。」

ローズ (Rose) さん (60才)

壊れずに残った唯一の海辺の家。太いクイラの木の柱の二階建て。柱の傷から津波の高さは1.5メートルとわかる。

「生後二ヶ月の双子の赤ん坊 (孫) を、一人は私が、一人はその母が連れて家の外に出た。3分後ぐらいに津波が来た。泳いで逃げたが津波の強さで赤ん坊はそれぞれの腕からはずれてしまった。翌日赤ん坊の一人の遺体がマングローブ林で、二日後にもう一人が海に浮かんでいるのを発見した。皆嘆き悲しんだ。」

訪問したときも、家族と親族が集まって、最愛の者を失った悲しみに沈んでいた。

ポール・テムウエル (Paul Temwel) さん (51才)

同地域の指導者。「津波で妻と孫を失った。二人の遺体は3日後に崩壊した家の下で発見された。妻の長い髪が木にひっかかっていた。妻はとても気をつく人で、地震と同時に皆を家の窓から外に出して逃げさせた。すぐに津波が来て、家族は妻を見失った。私はたまたまマングローブの林にいて家族と離れていた。嵐も波もものすごく強くて私自身も死ぬかと思った。」

彼は政府から借り受けていた丘の土地を、避難民たちのテントや掘っ立て小屋づくりに提供していた。彼の家族も、元の鶏小屋に住んでいて超満員。水はごくわずかの量の泉が中腹にあるだけで暮らしをまかなえるものではなかった。

一個の水タンクが支給されてきたが、雨水を集める屋根がないので、放置されていた。これは被災地で良く見られる風景である。タンクの必要な場所には、タン屋根がないと雨水補給にならない。

7/10

ヴェラ・ラベラ島の原生林のレオナ (Leona) 村へ晴れのち、雨嵐、のち晴れ。

同島では北西海岸部での被害が最大だった。そのひとつのレオナ村に小舟で4時間かけて行く。嵐の海の航海でずぶ濡れになった。

案内人は村の指導者たちと、ウルコ・ボスマ (Wilko Bosma) さん (Natural Resources Development Fund) さん。共にレオナ村背後の2500ヘクタールの原生林を守ってきた。

村の浜辺に着くと、子どもたちはハンモックに揺れ、女たちは樹の下の休み場所で憩っていた。

「津波は3メートルの高さで、あのココナツの木の枝が印よ。」「津波はものすごいのがまず北西から、ついで南東から来た」と口々に言う。85軒の海辺の家 (同じ部族の隣村とあわせて) が崩壊した。自分たちで建てた伝統的な家屋だった。津波後は崖の途中の狭い場所に、身を寄せ合うように掘っ立て小屋暮らしをしている。

人々の顔は明るい。背後の森からの木は再建のために豊富にある。小さいせせらぎではあるが、身体を洗ったり、飲み水や洗濯をする流れもある。ここでは男たちも崖上に水を運びあげていた。他地域では水汲みは女性が担っていたのだが、ここでは皆の協働がうかがえた。

20年来、森を守る活動の中心にいるのが指導者のマーロン・クヴェ (Marlon Kuve) さん (51才)。彼を中心に村が結束しているのがわかる。それぞれの部門で知恵と実力をもった逞しい指導者が育っている。

7/11

大河オウラ (Oula) に行った。

河口を少し遡るとアラン・ソーレ (Allan Sore) さん (56才) が一人で住んでいた。

上流からの二つの川が合流してくる一角にある。肥沃な大地だったのだろう。「以前は深くて清らかな美しい川と静かな森だった。今は上流からの大規模伐採による土砂の流出で、二つの川とも、濃い黄茶色に染まっている。」と語る。河は土砂を河口に運び、さらに海を茶色に汚染しながら、海底に土砂を堆積させている。ことに本流は、いっそう濃い茶色になっている。今回の津波は、こうして海に堆積した陸からの土砂を、再度河に押し戻し、河をいっそう茶色にしてしまった。河の底も浅くなってしまったという。両岸は津波でえぐられ、両岸の木も被害を受けていた。ここは伐採と津波と土砂の複合被害のような状況を呈していた。彼の家はなぎ倒されていた。

7/12

レオナ村の川

レオナ村の人々もさすがに嘆くのが川への被害だ。

「私たちは原生林を守っているけれど、周辺の村の川では伐採の泥が海に入り、私たちの海にも土砂がたまってしまうのがわかる。津波はその海からの泥を、今度は私たちの川に運んできたのだ。

ぜひ見てほしい」とその川に連れて行ってくれた。河口から遡上できないほど泥が積もり、小舟のエンジンを止めても櫂も漕げない。舟からの長い棒を突き刺しながら、遡上する以外にない。倒木が川に横たわっている。その遠くの山並みに原生林が見える。

「あの原生林を守るためにみんなが戦っている。」と皆が誇らしげに言う。

「津波以前はどんなに清らかで深い川で私たちの憩いだったか。でも今はこの川では泳げない。入り込んだ泥の中に沢山のワニも生息している。ほら、これが糞よ。」と言う。

次に隣村ヴァトロ村にも行く。二度目の伐採企業が操業中だった。「津波からの復興のための森の樹もない。食料もお金もない」と暗い顔で語る。伐採と津波のダブルパンチの窮地に陥っていて、インタビューするのがつらい。

帰ってくると赤十字のボートが到着して、家の再建のための大工道具類を配布していた。のこぎり、ハンマー、持ち運べる小さな製材機、シャベル、くい打ち器具などなど。レオナ村では森があるから、こうした援助が生きる！

最後の夕方は、斜面のせせらぎで、イモを洗うような混雑の中、私も身体を洗った。人が縦に一人ずつしか並べないような狭いせせらぎだ。待っている人々も楽しそうにわいわい言っている。「イモ洗いのせせらぎ」と私は名づけた。わずかな水でも、わけあって暮らしている人々の明るさがある。森からの流れはやっぱり気持ちがいい。

最後の夜、崖の中腹の小屋から星空をあおぐ。満天に大きな粒の星が散らばっている。東京にないものがここにある。不思議な気がした。津波で多くを失った村の、それでも幸せな暮らしが身にしみた。



ギゾー島ヌサ・バルカ地区ポール・テムウエルさん
妻と孫を津波で失った。



ヴェラ・ラベラ島のレオナ村の若者たち
森を守る気迫に満ちている

～調査のまとめ～

3週間にわたって被災地を回った。被災地では復興に向けて明暗をわけていた。

緊急支援による食料などの支援段階は終わり、被災者たちは今後自力で食料と飲料水と家の再建をする以外にない。政府も大援助団体もそうした支援する意図はない。

ところがギゾー島の被災地では、津波以前の暮らしにおいて、背後の森からの木材も、水資源も、畑の食料も少ない。水は雨水タンクに頼っている部分が大きかった。復興の道筋は厳しい。雨水タンクに頼る暮らしに慣れてしまっている。こうした暮らしのありかたそのものを問い直す必要も一方ではあると思う。

本来の熱帯雨林があれば、水資源も豊富にあるという暮らしの重要さを、それぞれの島々で再認識する重要な機会となった。一方、「援助」によって、住民がトタン屋根の家と雨水タンクに依存し、本来の暮らしを見失う危険性があるのではないかとも思った。

ヴェラ・ラベラ島では、熱帯雨林の伐採が入ったところは、再建の木材の不足、食料と飲料水の不足に加え、復興のための金銭不足が問題となっており、村人に意欲がない。

一方森を守ってきたレオナ村のようなところは、再建のための衣食住の糧がそろっている。たしかに伐採企業の侵入を食い止めることは大変なことだが、伝統の暮らしを土台にしながら、オルタナティブな収入を増やす取り組みに希望がある。

インタビューによると、公的基盤の整備（埠頭・病院・政府施設の再建など）に、今後外国大援助団体が力を入れることになる。政府の災害支援協議会の方は、ソロモン諸島での緊急通報システムや、コミュニケーションの拠点づくりに力を入れると言う。

では「森を守る会」のような小さな団体にできる支援は何であろうか。最後にNew Zealand Aidのマネージャーが示唆したことが心に残っている。

「どこか小さな村なりに焦点をあてて、そこを支援するとか、援助からもれがち小さな人々に支援する現地のNGOの取りくみと連携していくのがいい」。

今回の調査は、多くの団体や個人と出会って、ソロモン諸島の状況をより詳細に調査する機会ともなった。深い感謝の念を表明したい。また今後の調査の課題として、熱帯雨林伐採による土砂の流出、浅海底から深海底への土砂の崩壊と津波との関係、津波によるそれらの土砂の川へのゆり戻しなどの問題に、も注目しつつ、専門家の意見を聞いていきたい。

最後にこの調査を機会に出会った地域へ、今後「森を守る会」のメンバーとともに、調査旅行に出かけることもできたらと希望している。

ニューズレターでは概要をお伝えしましたが、「ソロモン諸島地震・津波調査報告書」(30頁)も作成しました。報告書希望者は「森を守る会」下記までご一報ください。送料込み500円(後日郵便振込)で頒布いたします。
png@ps.ksky.ne.jp Fax0493-24-8559

〒355-0016 埼玉県東松山市材木町16-24(松本)

今回のツアー参加者の清水靖子さん、米森文嗣さん（札幌）、飯出佐恵さん、朋子さん親子、松本浩一さん、類志さん親子に、ポートモレスビーで合流したリチャード・ブランドンさんを加えた7名は、ウィアク村に滞在して、タバを作ったり、森の家へ泊したり、有意義な日々過ごしました。以下は、当会の松本浩一さんによる報告です。

8月25日(土)

ニューギニア航空の直行便は、ほぼ定刻通り午後9時過ぎに成田空港を離陸、首都ポートモレスビーには翌朝午前5時（日本時間午前4時）到着。乗客の9割がオーストラリアへの乗り継ぎ客であり、パプアニューギニアに入国するのはいつものとおり20～30名。私たちは入国ビザの100k（約4300円）を支払い、荷物を持って税関を抜け、ホテルへ向かう。今年度、ウィアクへ行くための国内便は日曜午前中の便が月曜早朝に変更されており、丸一日、ポートモレスビー滞在を余儀なくされる。

午前11時、法律家ブライアン・ブランドン（以下敬称略）の長男、リチャード・ブランドンがホテルを訪れ、現地での活動内容の打ち合わせを行う。リチャードは、1996年、ウィアク村の電話設置に携わった技術者でもあり、今回は電話とソーラーシステムのメンテナンスのため、私たちとウィアクに同行することになった。折しも、ポートモレスビーで環境保護団体の主力メンバーが政府のすすめる温暖化防止のための排出権取引（多くは、原生林破壊とプランテーション開発）反対の記者発表をするため集結していて、夕刻、リチャードとともに清水、松本は彼らを訪問し、情報交換を行った。

27日(月)、国内便は定刻を1時間遅れ、午前7時に離陸。いつもはワニゲラ空港を使ってウィアクへ行くのだが、今年はワニゲラ空港の利用者が減り、草刈りもしていないため空港が使えないということでダイビングで有名なトゥフィへ向かう。朝日に輝く熱帯雨林に魅了されながら1時間のフライトでトゥフィ空港に到着。ウィアクの人々は、あらかじめワニゲラ空港が使えないことを知っていたのでトゥフィまで迎えに来ているはずだったが、誰もいない。トゥフィのヘルスセンター（診療所）へ行き、リチャードの知り合いの職員、ベヴァン・ヤガを通じて短波無線でウィアクへ私たちの到着を連絡してもらう。いつものことだが、隔絶されたウィアク村へのコミュニケーションは苦勞する。トゥフィとウィアクはヘルスセンターの短波無線を通じてコミュニケーションがとれることを今回初めて知った。ウィアクからの迎えが来るまで、トゥフィの港でシュノーケリングを楽しむ。

午後12時半頃、スピードボート（ディンギー）でウィアク村からの迎えが到着。帰りのガソリンを購入して午後1時50分、トゥフィを出発。ガソリンの値段が1リットル＝270円なのに驚く。ニューギニア本島北岸は

乾季であるが海は荒れている。

オペレータのアイシックの巧みな操縦で2時間の航海ののち、ウィアクへ到着。波をかぶって皆、ずぶ濡れ、荒波でたたきつけられたため、お尻も痛い。ウィアク到着後、ウィアクなど9つの村々をたばねる共同体マイカッド(MAICAD ~ Maisin Integrated and conservation Development)の代表たちと遅めの昼食をとる。マイカッドの代表はジェイフェット・テリナ、副代表ウインター・カンドロ、事務局長ベンジャミン・イフォキ、会計ネヴィル・カニア、ベンジャミン以外、選挙で就任したばかりの新メンバーだった。

長らく代表を務めたシルベスタ・モイが2005年4月に死去した後、いろいろ混乱があったようだ。ウィアク村といっても、東からガンジーガ、パイオバ、マウメ、ヤマケロの4つの集落がある。それ以外、ウヴェ、ユアユ、マルア、シナバ、アイララの5つの村々が海岸線にそって点在し、同じマイシン語を話す共同体とはいえまとめるのは大変だ。マイカッドの中心はウィアクだが、新体制はジェイフェットがヤマケロ、ウインターがシナバ、ベンジャミンがパイオバ、ネヴィルがガンジーガと地域ごとに配置されていた。

28日(火)

清水と松本は午前中からマイカッドメンバーと今後の協力関係についてさっそく会合をもつ。会合は午前中3時間にも及び、マイカッドの現状報告、日本側の提案するエコツーリズムの説明などを踏まえて、電話に代わる短波無線設置、タバ購入・販売など話題は多岐にわたった。

裁判闘争を通じて商業伐採を拒否し、原生林を守り続けるウィアク村だが、近隣には、アグロフォレストリーという、耳障りは良いが実態は熱帯雨林を皆伐しオイルパームプランテーションを作る計画が忍び寄っている。また、原生林の奥地では、銅やニッケルなど鉱山開発の試掘の動きもあり、ワニゲラ周辺では製紙原料になるアカシアの植林も始まっている。

いずれも原生林を破壊し、外国企業（および政府関係者）を潤すだけの開発行為だ。マイカッドは団結してこうした開発を拒絶し、自らの持続的な発展のあり方を模索している。

一方、私たちのエコツーリズムは、訪問した旅行者がウィアク周辺でしか得られない貴重な体験（自然・文化）を行い、その対価を必要な現金収入としてもらうとともに、訪問時に購入するタバを日本で販売し代価をマイカッド支援基金として活用してもらうことを骨子としている。日本側のエコツアーも彼らにとって

踊りやタバなど、文化の継承にとって大切な機会だということがわかり、一安心した。マイカッドの新メンバーも「森を守る会」のエコツーリズムの考え方を理解し今後も継続的に実施することが確認された。

ウイアク村の電話の状況については、電話会社への滞納額が7000キナ（約30万円）あり、回線が使えない状況となっていた。裁判闘争の際には、第三者に傍受されることのない電話は必要不可欠なものだったが、やはり村人にとって適切に管理維持することは難しいようだ。ランニングコストを考えても、電話を継続的に使い続けることは難しいと村人も判断したようで、リチャードの提案する短波無線を導入する方向で合意が得られた。リチャードが設置したソーラーシステムはメンテナンスの結果、完璧に電源として使え、短波無線を始めるには無線機器とアンテナがあればよいということがわかった。ライセンスには年間200～400kかかるが、すでにリチャードから指導を受けた技術者が育ち始めていてライセンス取得も問題がなさそうだ。無線機器とアンテナについては、日本側で調達する方向で取り組むこととなった。

午前中の会合を踏まえて、午後はコミュニティの代表者たちも交えて合意事項の確認作業が行われた。手間はかかるが民主的なやり方だ。近隣の村々の代表も集まり、マイカッドの説明を受けて村の自立と発展について長老たちが真剣に討議している。周囲には若者や女性たちも集まって耳を傾けている。マイカッドは原生林保護や医療福祉、文化保護等のための5カ年計画を策定し、金銭的なトラブルを避けるため、ファイナンシャル・マネジメント・ポリシーもつくることになった。

清水、松本以外のツアー参加者はタバづくりの見学や体験などを行い、村の生活を楽しんだようだ。夜、日本から持っていったプロジェクトを使い、1996年電話開通の際に録画した村人のビデオ上映会を開催した。

29日(水)、

飯出さん親子、米森さん、息子の4人は村人のガイドで原生林の中を歩き山奥のガーデン(畑)にある「森の家」まで行く。米森さんは日帰りとなったが、他3名は野営する。

清水、松本は午前中、タバの木が植わっている近くの畑に行き、タバの「植林」を行う。樹皮布の製造のためには、村人もタバの木を植林している。根から生えた若木を掘り起こし移植すると、2年ほどで樹皮布ができる太さになるという。今後、タバの植林もエコツアーのメニューに組み込むことができそうだ。

午後はリチャードとともに、新築されつつあるテレフォンハウスのなかでソーラーシステムのメンテナンス作業や使われていなかったCB無線(近距離)の設置を行った。

ウイアクには、英国国教会の牧師が管理する短波無線とヘルスセンターに設置された短波無線があるが、使用目的が限定されているため、マイカッドが日常的に使うことはできない。エコツアーのみならず、点在する自分たちの村々間の村落共同体すべての発展を事業として推進するマイカッドにとって、電話に代わる通信手段は不可欠だ。教会とヘルスセンターで無線のやりとりを聞いていたが、ランニングコストがかからずデータ通信も可能な短波無線が通信手段として最適であることがわかった。日本のNGO、ソーラーネットから託された30wの手作りソーラーパネル(シブヤ大学のメンバーが製作)をマイカッドに提供し、CB無線のバッテリーの充電とテレフォンハウスの照明用に設置した。

30日(木)、

清水・松本は、朝から学校を訪れ、7年生・6年生・5年生の3クラスで授業を行った。学校に来ている子どもたちは、知的興味も高く、勉強することが本当に楽しい様子。授業料が払えないため学校に通えない子どもも多く、野菜をもってきて授業料代わりにしてもらっている子どももいる。学校では、英語や数学、社会の他、環境や文化についても学習しているようで、身につける知識がすぐに生きるための力に役立っているようだった。

午後1時過ぎ、森から3名がガイドとともに村へ戻った。野生生物に詳しいハンソンの名ガイドもあり、とても充実した体験となったようだ。

午後2時からタバを購入する機会が設けられた。現在、タバの売買は各家単位で自由に行われている。大きなタバよりも、帽子やマット、バッグなど小さな加工品がよく売れるようで、それは学費などを支える貴重な収入源となっている。

私たちは、2005年同様、50枚のタバを購入したいと希望を伝えたところ、マイカッドは各村ごとに枚数の配分を決め、村の規模に応じて均等に対価が配分されるよう工夫していた。エコツアーで村に貧富の差が拡大することは私たちの最大の懸念になっているので、こうした配慮は大切なことだ。年配の方やミシンが借りられない家にとってはタバの加工は難しいようなので、私たちは現地でも売れそうな加工品ではなく、彼らの支援を考え無加工のタバを求めた。

今回は合計47枚を570キナで購入することができた。この購入価格は、現在のマーケットプライスよりもかなり安い水準であるが、タバの日本での売り上げがマイカッドの支援基金となることを理解して村人は協力してくれた。

2005年の購入したタバの売り上げは約12万円であり、マイカッド支援基金として積み立ててある。今回購入したタバも村人の意向と善意に報いるため、しっかり販売していかなければならない。

夕方、ウイアク最後の晩となるため、フェアウェル・パーティーが開かれた。狩りでしとめた野ブタの丸焼き、シーズンのため美味しいマグロ、濃厚な味わいのマッシュルームなど、いつものタロイモやサツマイモ料理に加えて豪華な晩餐となった。朋子さんが日本から持ってきたカンカラ三線で何曲か披露。沖縄の音楽が不思議と似合ったウイアク最後の晩となった。

31日(金)朝、

ホストファミリーと別れを惜しみ、スピードボートでトゥフィへ戻る。海は穏やかだったが、ガソリンが足りずひやひやしたが、何とか2時間でたどり着いた。途中、リチャードはC B無線がどこまで届くか実験していた。ウイアクから最も遠く東にあるウヴェにも電波が十分届くことが分かった。今回設定したC B無線を3台使えば、マイカッドの村々相互のコミュニケーションはスムーズにとれそうだ。今回のツアーでは、リチャードのお陰でいろいろな懸案事項が解決した。リチャードには「森を守る会」と協力関係を継続してもらえるよう「支部」としての仕事を依頼し、快く応じてもらった。

夕刻まで、トゥフィの空港ちかくで飛行機を待つ。予定とおり迎えの飛行機が来て、ポートモレスビーには7時過ぎに到着した。

さいごに 今回のウイアク村エコツアーは、マイカッド新体制直後ではあったが、趣旨がよく理解され有意義なものとなった。ニューブリテン島各地に比べて最もツアーで行きやすい場所、ウイアクでも、コミュニケーションや空港からの移動など、数々の困難がある。エコツアーというにはあまりに小規模であり、採算に合う商業ベースのものではないが、原生林を守り続ける村人と交流し、彼らから学び、彼らを支援する意味では「森を守る会」にとっても重要な事業となっている。来年度に向けて、短波無線局を開局し、現地との安定的なコミュニケーションを確保し、エコツアーをより充実させていきたいと思う。ウイアクでの小さな取り組みが今後、各地とのエコツーリズムを通じた原生林保護活動に発展することを期待したい。



牧師の短波無線をチェックする清水さんとリチャード



ソーラーネットから寄贈されたパネルを設置



ガーデンでタバコの木を植林する



ウイアク村の学校で授業を行う



村人が持ち寄ったタバコを購入する様子



「森の家」からの原生林ウォーキング



4泊5日、エコツアーのお別れ

ツアーに参加して 松本 類志

パプアニューギニアという国は私にとって父の影響が良く耳にする名前であったし、大学で林学を勉強し、熱帯雨林について興味を抱いている私にとっては訪れてみたい国のひとつであった。去年の同じ時期にも父から誘いがあり行く機会には恵まれていたのだが、去年はなぜかパスし、今回大学3年生にして初めて、そのパプアという地を訪れる運びとなった。

ウイアク村に着いた一日目はほんとに右も左もわからず、それまでの移動に時間もかかったため、かなりめまぐるしく過ぎて行った印象である。村の夜は早く、そして朝も早い。日本の私の生活とはまったく正反対の、太陽と共に活動する規則正しい生活のリズムが、この日から本格的にスタートした。

二日目は旅行ツアー風に言うなら終日フリータイムであった。その分、この日は私なりに村の色々なことを吸収するのに適した日となった。午前中は彼らの文化のひとつであるタバ作りを見学した。当然ながらすべて手作業であるので、その人の技術や心がストレートに作品に表れる。子供たちは年配の女性たちがタバを作るさまを、ずっと見て育っていくのだ。昼食後は、ホームステイ先の自分と年が同じくらいの青年が、ビーチの散歩に付き合ってくれた。小さな子供たちも、私が集落を移動するたびにちょこちょこ付いてくるので、このときも同じ感じで何人が同行してくれた。テレビなどで、このような国を訪れた人たちが感想としてよく、“子供の目が輝いていた”と言うのを耳にするが、それはまさしく本当のことであった。異国の地からやってきたもの珍しさが手伝っていたのかもしれないが、子供たちは声をかけなくてもすぐ寄ってきては笑顔を見せてくれた。

このことは、この旅の中で私の中にとっても大きな印象として残っていることのひとつでもある。ホストファミリーの子供たちは私がちょっと挨拶するだけでパッと笑顔になるし、集落の子供たちはたとえ言語が通じなくても、目で彼らの言いたいことや感じていることがわかるような気さえした。私はサッカーが好きなので、夕方になると彼らのサッカーの輪の中にいらしてもらったりしていたのだが、みんなひとつひとつのプレーに笑顔で反応してくれた。

二日目には、もうひとつ是非書いておきたい出来事があった。夕暮れ時に、サンデースクールの歌の練習があるらしく、子供たちが集落の広場で輪を作って歌っていたので、その輪の後ろから彼らの歌を鑑賞した。その歌は、内容こそ言葉が違うのでわからないものの、本当に感動的であった。自然に感謝して、また自分も自然の一部であることを知っている。おだやかな時の流れの中で聞く彼らの美しい歌声は、涙が出てきそうなくらいに私の心に響いた。それは、今まで聞いたどんな歌よりも素晴らしいものだったと思う。彼らは確かに、電気や水道やパソコンや車といった、私たちがよく“現代文明の豊かさ”と謳うものは、もっていないかも知れないが、その心はとても豊かで

あり、あたたかであるのだ。この夕食後のひとは、私のそれまでの価値観を大きく変えるものであった。

三日目と四日目は、森の中にいよいよ入り、彼らの“ガーデン”を見せてもらった。伝統的焼畑農法に、初めて直に触れる瞬間となった。今までは知識として伝統的焼畑農法が、自然と共生可能な農法であることは知っていたが、見て、話を聞けば、なるほど、確かにしっかりと計画されたサイクルを持っていて、森の状態をしっかりと見極めてから、森の木々たちと相談してから、農業を行っているのだ。土地をしっかりと休ませ、植生が回復するのを待っている。こうなると、ウイアク村の人たちが耕作する土地は相当な広範囲にわたり、また綿密にマーキングされた地図などを持っているのかと思うが、まったくそうでないから不思議だ。彼らは、私たちには到底想像できない“なにか”を持っているのであろう。しかしこれもまた、先代から長く続く彼らの農業への知恵がなければ成せない技なのである。

このように、ウイアクの人たちはまさしく、「森の民」であった。伝統的な生活を永く続けてきた彼らだが、今は様々な問題を抱えているようである。それは、内部発生的なものもあるかもしれないし、外から願わずして持ち込まれたものもあるであろう。しかし、自立した生活、すなわち自治をしっかりと維持していくことが最も重要であろう。私たちは、そのサポートをしていく必要があるし、またそのような問題が世界中で起きている現実も、広く認識していく必要があるだろう。今回の旅は、そのようなことを自分の目で見て、気づくよききっかけともなった。あの子供たちの笑顔がこれからもずっと続くために、私たちは身近なところから行動することが求められているのではないだろうか。

ツアーに参加して 飯出 佐恵

この旅に参加させて頂きお世話になりました皆様へ感謝いたします。数年前に「森を守る会」で清水様の撮影されたスライドを見せて頂いてから、“行ってみたい憧れの地”でした。

バナナの生える島が大好きな私は、まささらな気持ちで旅立ちました。ワイルドでハードなワクワクする旅でした。椰子の木が茂る絵のような村の景観にウットリし、優しい人々に感謝する日々でした。電気が無くても暗がりでも見える目が有り、心地よい風が吹いていました。水道が無くても虫が乱舞する豊かな川の流れが有り、ガスが無くても枯れ木やココナツの殻が有りました。貨幣が無くても収穫物を交換し、ココナツはいつでも喉を潤してくれます。自給自足の生活は人が神様からもらった楽園のようでした。

森の中も又然りて、蝶が何処からかヒラヒラと舞い出で、鳥の鳴き声で満ち溢れています。森がどれだけ大切なのかを森の中を歩きながら、野営をしながら教えていただきました。あちこちに聳え立つ大木は生活必需品に加工されますが、大木を斧で切り倒す労作を“チェーンソーがないからねー。”を何度も強調しながら話してくれました。

ツアーに参加して 飯出 朋子

我々の歓迎の為に、野豚除けの柵作りや開墾作業がストップしているとのお話、ましてや森での1泊では焚き火の周りで野営をし、鍋持参で調理をしてくださったのですから、ご迷惑をお掛けし歓迎して頂きましたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

野豚を生け捕る罠は弦を利用した簡単な物でしたが、槍を掲げ森に入る若者は勇壮な狩人です。私達の歓迎にも前日に仕留めた野豚を振舞って下さいました。

野豚は締まった味でさっぱりと美味しく、料理はトマトとココナツをふんだんに使い新鮮な野菜や魚を煮たもので、2食しか摂らず、子供たちはお腹がすいたらココナツを飲んで果肉を食べているので皆健康そのものでした。

生け捕りにした動物を家畜やペットとして村で放し飼いにしています。

野豚は早朝床下でブフィーブフィーと鳴き、幼女に撫でられるとゴローンと寝てしまって巨体に似合わずとても可愛いもので、瓜坊主が3匹生まれ駆け回っていました。

最大の人気者はクスクスで、いつもは樹上で寝ていますが、地上に下ると俊敏に走り出し、人間の赤ん坊がそれを追っかけて這っていく姿は何とも微笑ましいものでした。

彼らの五感はとても研ぎ澄まされていて、一緒にいるだけでかなりリフレッシュされたように感じると共に、生きる喜びを分けて頂いたような新鮮な感動を覚えました。

これからも社会的な問題はいろいろと起こるでしょうが、微力ながらも“森を守る村人達”にエールを送り続けられますように願っております。どうも有り難うございました。

今回の旅に参加したきっかけは会員である母の誘いであった。私はパプアニューギニアのこと、伐採のことなんてあまり知らず、行く？と聞かれたとき、正直とまどった。しかし、清水さんの本を読んだり、今回は電気もガスも水道もない原始的な生活をしている人々に会えると聞き、こんな機会逃したらもうないかもしれないと、気持ちはすぐに固まった。

1週間の旅行のうち、ウイアク村に滞在したのは4日間だけだったけど、本当に感動でいっぱいの旅であった。

まず感動したのは人々の素朴さとあたたかさである。ウイアク村の人々は私たちをととてもあたたかく迎え入れ、ホームステイ先の人々はもちろん、村中の人々が子どもも大人も始終優しく気遣ってくれ、本当によくしてくれた。

印象的だったのは子どもも大人もみんな目がきらきらして、すごくいい顔をしていたこと。日本にこんなきらきらした目を持っている人は果たしてどれくらいいるのだろう。ウイアクで生活を共にしていくにつれ、その理由がわかってきた。

まず、時間の流れが日本と全く違うのだ。朝、日が昇るとともに起きて、掃除、洗濯、食事、畑仕事、夕パ作り、日が暮れたら夕食、団欒、そして9時くらいには就寝という生活。特に時間を決めていなくてもなく、それらはとてもゆっくり、じっくりと行われている。こどもは両親を手伝い、近所の人々、村のみんなが助け合って生きている。



飯出佐恵さんの描くウイアク村(上)・トゥフィ(下)



食事も、自分たちで野菜を作り、漁や狩りをして、必要な分だけ取って調理して食べる。家も道具もほとんどが自然素材、人の手で作られたものを使っている。

そこには人の知恵が溢れ、人間の本来の生活があった。きっと遠く遠く昔の日本人もみんなこういう生活をしていただろう。お金がなくても豊富な食べ物、雨風をしのげる心地よい家があり、時間に追われ焦ることもない生活。そこにはストレスといった言葉はなく、私たちにはない豊かさがあった。

豊かさの基準、価値感は一それぞれだけど、お金や物がいっぱいあることが豊かではないと私は思う。ウイアクの人々はそんな自給自足の生活に誇りを持ち、森がなくなったらそのような生活が出来なくなることを知っている。

3日目に連れて行ってもらったガーデン（畑）と森は本当に素晴らしかった。様々な種類の木々や鳥、昆虫がいる森はいのちが溢れていて、豊かな水を生み出していた。

ウイアクの人々は自然の中に溶け込んで生活をしているので、生活で生ずる汚れもすぐに自然に還っていく。狩りをすることで生態系の上部にいる野ブタ等動物の数も調整し、人間が生態系の一部として機能している。

理想的だと思いつつも、日本でこういう生活をすることは難しい。

森を守り続けていけば彼らの生活は守られる。しかし、今現在地球規模で進んでいる温暖化、異常気象、それらの被害がここにも及んだら・・・？ということが気になった。

帰ってきてから、やっぱり夜になったら電気はつけてしまうし、時間を短縮するために車にも乗ってしまう。私たち日本人は常に環境に負荷を与えながら生きているのだ。

一応、旅の前もマイ箸を持ったり、環境負荷の少ない製品を選んだりと環境やエコなことには敏感なつもりだったが、もっともっと責任をもってできることはしていきたいと思った。

そして他に自分にできることは、この素晴らしい体験を人々に伝え、そういう人を増やしていくことである。そんなことに気づくことができたのも、自分の目で見て聞いて、体で体験したからこそであり、五感で感じることの重要性も再認識できた。

旅に誘ってくれた母はもちろん、お世話をしてくれた松本さんを始め、この旅を共にした全ての人、旅先で出会った人、もの、全てに感謝したい。

本当にありがとうございました。

あの子は今日も 米森 文嗣

あの子は今日も、海辺の椰子の木陰に、一人たたずんでいるのだろうか。
古びた布にくるまれた、何かを胸にしっかり抱いて。
どこを見るでもなく定まらぬ目、軽くあいた口、力なく垂れた唇、乾きかけ鼻汁。

ウイアク村ガンジーガの昼下がり。
カメラを手にした僕を取巻くように、砂の上に戯れる小さな子供達の群れ。
そこから少し離れて、一人たたずんでいる、あの子。
遊びに加わりたくもせず、言葉を発することもなく、静かに眺めている。
子供達も、彼の方を見ることもなく、声をかけようともしない。
彼の様子や視線が気になりながら、何となく近寄りたく、その日は暮れた。

翌日の朝。
浜辺のカヌーに腰かけ、心地よい風にタバコを燻らせ、海を眺めていた。
ふと気づくと、いつの間にか、彼が僕の横に座っている。
古びた布にくるまれた、何かを胸にしっかり抱いて。
それは何、と尋ねた。
そっと差し出された、包みを開けてみる。
パイプらしい。
綴じがほぐれ、ばらばらになっている。
彼は何も言わず、それを指差し僕を見詰めている。
僕は声に出し、それを読み始めた。
彼は時々うなずくかのように、黙って、それを聞いている。
暫しの時が流れた。

翌々日の夕方。
いつものようにカメラを手にした僕を取巻くように、砂の上に戯れる子供達。
そこから少し離れ、一人たたずむ彼。
明朝、人々の温かい愛情に包まれて過ごした、この村を去らねばならない。
集まった子供達にレンズを向けながら、彼を手招いた。
こちらに歩きかけては、迷っているようだ。
そのうち、子供達の中の女の子と男の子が、彼に走り寄って行った。
彼も子供達も、一緒に写真に納まった。

パプアニューギニアでの沢山の写真の中で、彼の写真は、これ一枚きりである。

2008年 ウイアク村へのエコツアーご案内

来年8月、マイシン語を話すウイアク村等へのエコツアーを開催する計画があります。今回ツアーに参加した方々の感想にもあるとおり、原生林を守りつづける村での体験は貴重なものとなるでしょうし、地域社会の発展を考える共同体のマイカッドにとっても大切な支援となります。ツアーへのご参加をご希望な方は下記までご一報いただければ、ツアー参加の手順や詳しい内容等をお知らせいたします。よろしく願い申し上げます。

「森を守る会」事務局長 松本 浩一 png@ps.ksky.ne.jp 携帯090-2328-8518

お知らせ 詳細は別紙を参照ください。お誘い合わせの上ぜひお越しくださいませ ビデオ・スライド・お話し

ソロモン諸島地震・津波被害調査報告会

ソロモン諸島を襲った巨大地震と津波被害

講師：清水靖子

～被災3ヶ月、原生林を守る村々と伐採地には復興に向けた大きな違いが・・・～

日時：11月11日（日）午後2時～4時

場所：幼きイエス会ニコラ・バレ 修道院 9階集会室
（千代田区六番町14-4 03-3261-0825）

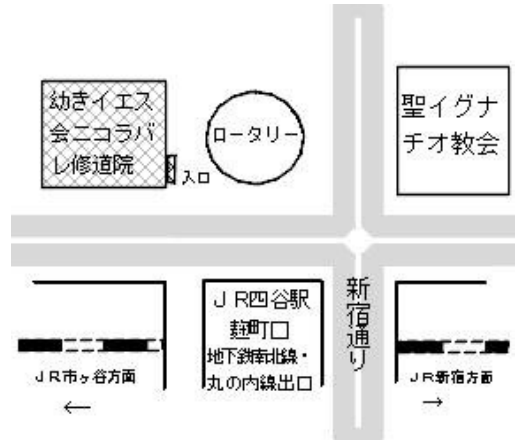
参加費：500円

同時開催 ウィアク村の タパ・展示即売会

午後4時～5時

交通：JR四ッ谷駅 麹町口下車徒歩1分
地下鉄丸の内線 四ッ谷口より徒歩3分

問い合わせ：パプアニューギニアとソロモン諸島を守る会（辻垣建築設計事務所内 03-3492-4245）



『パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会』

活動内容

熱帯雨林および森の暮らしの素晴らしさを伝える。
エコツーリズムを通じた熱帯雨林保護活動。
原生林を守りつづける村人の支援活動。
熱帯材の使用削減。国産材の活用推進。
被災した現地住民への緊急支援活動等。

カンパ受付

郵便振替口座：東京00100-1-614216パプアの森



TAUBAN 号 あとがき

【Tauban(タウバン)：ウィアク村の言葉で“Good”という意味。「おはよう」はラシュラン・タウバン、「こんばんは」はラッダン・タウバン。】

今回掲載のウィアク村の滞在記を読んでいて、以前訪れたとき、大人や若者たちが、素晴らしく器用な技(私の目から見るとそう見えるが、彼らにしてみれば、当たり前)を使って、食事の支度から、ガーデンでの作物作り、マット編みやタパのための染料作り他の作業をこなしていたことを思い出しました。その周りにはどんな事もすすんで手伝う子どもたちの姿があり、ガーデンで収穫した作物がいっぱいの重い袋を走って行って受け取り、誇らしげに担いだ少年がふらつくのをお母さんたちが笑って見守っていた事もありました。元気な子どもたちは、私たちにもいつも優しく手を貸してくれ、それが当たり前になっている事に感動したものです。

村の目の前のサンゴ礁の海、原色の鳥たちが棲む巨木がそびえる原生林、透明な川の流れ、子どもたちに引き継がれるその素晴らしい恵みをが絶えてしまうことのないよう、是非、この秋、上記の集会あるいは注文でこの地域で作られたタパ(樹皮布)でご支援を!タパの手触りは、森の息吹き、デザインは精霊の便りです。(S)

当 会 活 動 関 係 す る 出 版 物 ・ 資 料	清水靖子	『日本が消したパプアニューギニアの森』 1994 (明石書店) 品切れ
	清水靖子	『森と魚と激戦地』(北斗出版) 1997 「森を守る会」で販売中! 送料込1790円
	辻垣正彦	『こだわりの木造住宅』(講談社) 2000
	辻垣正彦	『やっぱり昔ながらの木の家がいい』 (晶文社) 2004
	清水靖子文	『森の暮らしの記憶』(自由国民社) 1998 マーロン・クエリナド画・英文 品切れ
	藤林泰・長瀬理英 編著	『ODAをどう変えればいいのか』(コモンズ) 2002
	清水靖子 週刊金曜日 2001年5/18号	『日商岩井が汚染したマタネコ・クリーク』 第9回 「週刊金曜日」ルポルタ・ジュ大賞 報告文学賞 受賞作品
紙パルプ植林 問題市民ネット ワーク	『沈黙の森・ユーカー ～日本の紙が世界の森を破壊する～』1994 (梨の木舎)	

発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会

連絡先

〒141-0031品川区西五反田8-10-14-206

辻垣建築設計事務所内

03-3492-4245